

## グローバル格差を生きる人びと ——「国際協力」のディストピア——

友松 夕香 著

東京 岩波書店 2025年 xii+212+12 p.

国際協力は国境を越えて現存する格差を解消することを目的の一つとしている。しかし、この格差は国や地域の「後進性」に起因するという理解が先進国や国際機関の間では一般的であり、これまでの国際協力はその考え方のもとで進められてきた。本書は、こうした国際協力の在り方に疑問を抱き、国際協力の枠組みを考える際の出発点となるグローバル格差を「人びとの視点」から捉え直すことを目的としている。著者は、不均衡なグローバリゼーションが生み出した格差社会のなかで、もたざる国の人びとは富める国の人びとに対して不満や不信を募らせる一方で、先進国の人びとは途上国からの移民を危険で治安を悪化させる存在と捉えており、相互に負の感情を抱くと指摘する。そして、この負の感情から派生する軋轢や暴力は、従来の国際協力の枠組みでは解決できないとする。

全9章からなる本書は、序章で上記の問題を提起し、本編（第1～7章）でこれまでの国際協力がもたらした歪み—ディストピア—の具体例を提示、終章で新たな国際協力の在り方を考えるという構成を取っている。事例として、西アフリカ、なかでもガーナの人びとの暮らしに見出される現実を拾い上げている。たとえば、識字教育を受けて育ったデジタル世代の若者たちが、学歴に見合う就職先を見つけられず、英語力とスマホを使って国際ロマンス詐欺に従事する様子が描かれる（第2章）。また、循環型の在来農法で持続可能な農業を続けてきた地域で、新しい技術や化学肥料により生産性を高める近代農法（緑の革命）を推進した結果、価格高騰で化学肥料が買えなくなり畑が荒れるという矛盾（第6章）や、女性の地位向上を目指して近年積極的に導入されているエンパワメント推進が、ガーナ北部の農村地帯の女性たちをより過酷な労働へと追いやっている現実（第7章）がつまびらかにされる。

これまでの国際協力の何がいけなかったのか。確かに現在の国際社会や国際制度は西欧諸国が導入した主権国家体制をその存立基盤としているが、国際協力に対等なパートナーシップ意識を組み入れたり、市民レベルの国際協力も進められたりしてきた。ただ、混沌さが増してきている今日の状況のなかで、従来の枠組みでは解決できない問題が生じているのも事実である。著者は、これまで見落とされがちであった「人びと」に注目し、その負の感情を融解する国際協力を構想することがグローバル共存につながるとする。これはフィールドワークを長く積み重ねてきた著者ならではの洞察であり、今後の国際協力の枠組みを考える上で非常に重要な視点を提示している。

箭内 彰子（やない・あきこ／アジア経済研究所）



本記事は、クリエイティブ・コモンズ表示 4.0 国際 (CC BY 4.0) ライセンスのもとで提供されています (<https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/deed>)。オリジナルの出典と著者を表示することを条件として、自由に配布、複製、利用することができます。

